

事務局通信

年の瀬も迫り何かと御多忙のことと拝察いたします。

みやま文庫も誕生第一年、いく多の試練にあいつつも日に日にすくすく伸びてまいりました。おかげ様で当初の会員十名の目標をはるかに突破して十一月二十日現在千五百余名となり更に躍進しようとしております。

皆様の絶大なる御支援を心からお礼申し上げます。

尚事業の方も漸次軌道にのり、さきに第一巻「赤城」を刊行配本いたしました。この度第二巻、第三巻も出来いたしましたのでお届け申し上げます。どうぞ御愛読下さい。ただここで残念なこと十月以降申込れた方々に対し全五巻の中「上野村の民俗」上・下」という二冊が配本出来なくなつたことです。これは会員組織による限定出版の第一年目のため一方では会員募集を行

いながら、一方では編集、出版、配本という仕事も進めてゆかなければならないという特殊事情から起つたことで会員増加の予測がつかめず当方としてはかなり冒険的に多数印刷したつもりがものが会員の急速な増加に追いつかなかつた次第、いづれにしても申訳ないことでした。尚こうした方は個々に連絡してあり、会費も八百円という事になつて居ります。

いよいよ年末になりましたので会の運営の都合もあり会費未納の方は是非ご納入下さいませよう御願ひします。直接御持参、現金書留、振替（東京一四二五九 みやま文庫）等何れかの方法で、又同一職場の方々には成るべくまとめてお送り下さい。大へん事務的なことばかりとどくとしく申上げましたことが何卒よろしく御協力の程お願い申し上げます。



☆次回配本☆

次の第三回配本は

「利根と上州」(下)

(産業・観光・文学編)

「上野村民俗」(下)

(部落後編・芸能編)

で、一月下旬刊行の予定で

既刊「赤城」、「利根と上州」(上)

「上野村の民俗」(上)と合わせて五

冊で、今年度分は終了いたします。

なお、この会報は、広く会員の皆様の御意見をのせ、会員の「自由討論の場」といたしたいと思いますので編集への要望、既刊分に対しての感想、明年度の企画についての御希望等ございましたら、次の

前橋市清王寺町一四六

群馬大学図書館内

みやま文庫編集部

あて、お送り願ひします。



みやま文庫

会報

No. 1

36.11.25

聴秋

相葉 伸

(みやま文庫編集委員長)

みやま文庫の創立総会が昭和36年3月2日行われ、群馬全県をあげて、その出版文化活動が茲に初まつた。これは県の文化史の上からも、画期的な企画であるばかりでなく全国的に見ても、兵庫県の「のびぎく文庫」以外にはその例を見ない地縁の協同による文化出版として意義が深いものであつた。ところであつた。ところがたまたま私がその編集責任を賜せられ、非才に擧つて挺身することとらつた。私以外にも編集運営、事務局の役割がきまつたが、誰も彼もどうしたら広い層の読者にしたしんでもらえるかという課題を目標に、本務の合い間に皆手弁当でその情熱をもちよつてゐるのである。

私は編集の諸氏にはかつて、この香り高い群馬の文化を出来るだけ平易にかみくだいてし、かも尚高度の清香を放つものにしたたいと心がけている。

第一刊の「赤城」は幸いに中央地方の各紙・誌をはじめ諸方面からの温い好評を得たことは感謝に堪えない。ここに第二刊「利根と上州」上巻および第三刊「上野村民俗」上巻を御送りする。

聴秋の机辺に、あるいは行旅の軍中に、読者諸賢のよき伴侶となつて欲しいと思ふ。至らざる点や今後の希望については惜しみなく寄せられたい。

「文庫」はつねに読者と共につくられ、その愛郷の胸裡を温床に永き未来を生き行くことを信じている。

手をつなぐ文化運動に

古 屋 栄 吉

(みやま文庫運営委員長)

長い問産女の悩みを送つたみやま文庫も、県下各層各域の熱誠あふれる御声援ですでに第一回配本を終えまして四回分も印刷が大部分あり、初年度は予定通りにまいりそうです。しかし、最初の構想は昭和三十五年の夏であつたために、その後の異常な物価高の上に、少しでも立派な

ものを配本したいという関係者の熱意があふれ過ぎて、到底二千百の会費でやってゆけなくなりました。運営面の責任を負われた以上、なんとかして会費外の篤志寄附をと思ひまして、東武鉄道株式会社に懇請した結果福島文太郎氏はじめ本社の井上専務と直接会談いたしましたところ、快よく二十万円を戴くことができました。ここに御報告して会員の皆さまとともに厚く御礼を申し上げます。

このみやま文庫は私の考え方としては、第一に多くの人をつなぐ文化運動であるということの基本にしたものでありたいと思つております。したがつて、(一)これを個人の利益や宣伝に使い私有物化さないこと。(二)利益団体ではないので儲けるという事業でないこと。この二点を敵に敵めてゆきたいと思ひます。本会がつくられて、一冊の本ができるまで、目に見えないカゲの力で奔走して下すつていられる方々が実に多いのです。会員募集、集金、執筆、編集、配本とみな黙々として働いて下さる方々の美しい奉仕に感激して実は私もその任ではありませんができるだけやれるだけやつてみようと思ひまして創立以来今日まで走り使いをして参りました。この文庫が、ある特定の人の自慢や手柄にされる日はこの文庫の潰れる日だともいえます。みんなひそかに手を握り合つてその協力の上にご発展の道があるのではないのでしょうか。一人ではどうにもなるものではありません。

みやま文庫は会員みなさまのものであり、会員の協力なしにはやつてゆけません。今後の運営面でぜひ忌憚のない御意見をいただきたいと思ひます。あたらしい仕事だけに欠点だらけ不十分だらけではありますが、誠心誠意みなさまのみやま文庫として、さらに二才三才と脚を重ねていきたいものです。神田知事(会長)も、私とこのことを話しあつた時に、「よい仕事ですすからとにかく続けましよう」と力強く言い切つております。

さて第二に、会員は来年度はぜひ二千人にしたいと思つております。初年度は千人予想でことを進めたところ、一千五百人を突破する嬉しい悲鳴をあげましたが、そのため一部の方々には配本できない失敗をしてしまいました。

「文化運動としては成功、事業としては士族の滴法」と大分痛いお叱言を頂戴しました。なんとかして不足分をカバーしようと思ひましたが莫大な費用がかかるため断念しました。まことに御熱意に水を注ぐ結果になり運営の責任者として申訳なく存じております。団結の力を強めるには一人でも多くの御参加を願うことですから、二年度はぜひ二千名会員の繰で努力いたすつもりです。会員のみなさまの絶大の御声援をお願いいたします。

もう今年も残り少なくなりましたあたらしい一九六二年がすぐそこまで来ております。どうぞよい年でありますように――。

「編集日記」

月 日

「へき地の子どもたち」執筆打合せ。へき地教育連盟を中心とした。現場の先生方が集まる。どの人からも、多年の実験と経験を通しての、「へき地」の子等に対するなみなみならぬ情熱がうかゞはれる。議論旨出、好企画多し。結局、写真を主にした「目で見るシリーズ」で行くことに決定。「地元で、みんなの力で、よい本を出す」という。文庫の趣旨にピッタリ。こうした企画の編集は張り合いがある。

月 日

会員数、千三百を越える。これ以上ふえると、すでに印刷した「上野村の民俗」は品切れとなり、配本不能との事。あわて、対策を協議する。嬉しい

困惑だ。

月 日

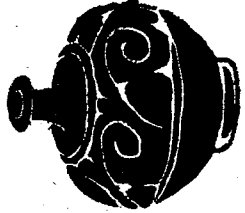
第二回配本「利根」の口絵原画届く。利根川万代橋の錦絵である。四色のテラツクス刷りである。色の感じ、好評、むしろ原画以上。次、次、と盛り沢山の企画に、思はぬ経費もかさむが、事務局、会計の人たちの良き協力を得て、編集まことに好調。「利根と上州」も赤城に劣らぬものとしたい。

月 日

朗報。運営委員長長の尽力により、東武より「赤城」「利根と上州」の二冊に対して多額の寄附ありとの事。印刷費等の値上りで行き悩んでいた企画も実現できるか。

月 日

「赤城」配本終わる。新聞書評欄はじめ一般に好評のよう。特に表紙の装訂は見事な出来上りで評判のようである。原画を頂戴した時は「どうか」と懸念したのだが。今更ながら、福沢画伯の筆力に驚く。



学習書でもあると思ひます。

楽しみながら勉強出来るこの様な立派な本が我が郷土に於て出版されたという事はとても意義ある尊い事と思ひます。

これを執筆された先生方は勿論の事これを編集され又事をこれまで運ばれた先生方の御苦心の事もさぞかしと拝察いたして居ります。承るところによりますと、この次は赤城山同様全国にかくれもない坂東太郎の「利根川」について出版されますとか、又利根川についても色々の方面から面白いお話が聞かせて頂けること、楽しみにお待ちしております。

私達は群馬に生れ群馬に育ち乍らまだ郷土の事について認識不足の事が随分と教多くあると思ひます。これから続々と色々な本が出版され色々教えて戴ける事を楽しみます。

当局に於れましては既に色々計画をなされました事と存じますが上州は古墳やら史蹟も多い土地ですので私達

の頭の中にもこうしたお話が断片的に入つて居りますが古代文化等に関しても系統的に色々な教を戴き度くこの際お願い致します。

十一月十六日

「赤城」をよんで

林 ミ チ 子
(前橋市・事務員)

「赤城」を開いて、何よりもまず、表紙の垢ぬけたスマートさに驚きました。生意気な事をいうようですが、とかく今までの地方出版物の装訂は、いかにも泥臭く、バツとしないものが多かったようですので、この赤城のスッキリとした装訂は本当に嬉しうございました。

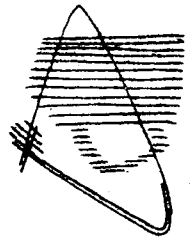
上品で、神秘的で、それでいて親しみやすい、ふるさとの山、私たちの山、赤城をヒタリ象徴するこの画こそ、みやま文庫の姿であつてほしいと存じま

す。

「焚火のころ」は、息もつかず読み切りました。この山をこよなく愛された志賀先生御夫妻の青春への追憶というようなものを感じ、また貴重な写真のいくつかにひき入れられて秋の夜長も忘れませんでした。

「昔のイメージをこわしたくないから赤城には行きたくない」との先生のお氣持がジーンと胸にこたえました。

赤城も年ごとに開けて行きますが、この山をいつまでも美しく清く保つことこそ、赤城をふるさとの山とする私たちの責務ではないでしょうか。

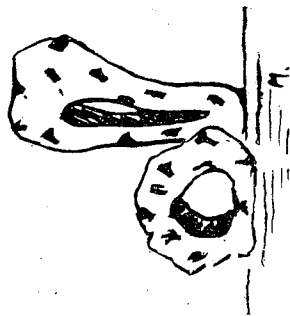


サンデー 毎日

11月26日号所収

「赤城」 —ふるさとの山—

群馬県の郷土文化紹介のために刊行されたもの。冒頭に志賀直哉を語った座談記事があり、「赤城」さま以下十五項は、山の信仰、伝説、民俗、地質、気象などを土地の専門家たちが分担して執筆している。また「山の作業」には、耕作と養蚕、斜面の開拓、民家の型など興味ある研究報告がある。四季の景観や名所コース案内など、観光手引きとしての役割をも果たしている。



横田 正知氏

(文学研究家、写真家)

編集委員長あて

前略、御礼がたいへんおくれましたが、市川為雄先生を通じて、「赤城」を、まことにありがとうございました。

来信

志賀邸座談会を写真におさめる仕事で、ほんの少しばかりお手伝いをしただけでしたので、恐縮に存じました。けれども実のところ頂いてよかつたと思つています。と申しますは、まえから赤城へは行きたいと考えていましたが、このご本を拝読して、いつそその楽しみが大ききわき立つて参りました。

ことに科学と芸術、宗教など丸ごと赤城がつかめるのがうれしく、どうやら私も赤城ファンの一人となりそうです。御礼申し上げます。

月 日

会員だより

「赤城」雑感

武井 覚 広

(群馬大学厚生課長)

上州名物の空ッ風が、びようびよう
と吹きさらすとき、赤城はまるで生き
物で、白色の怒濤を捲きおこしている
ようだ。やがて春になると、駱駝の背
のようなその峯々は、はるかかすみの
中に浮んで、一幅の児童画になる。秋
の紅葉は、武将期の夢をいさない、清
澄な大沼は時に、幽遠な太古をしのば
せ……けれど、赤城はブライエタイに
とむ山だ。

みやま文庫第二巻「赤城」には、多
くの学術的成果がもりこまれている。
今や赤城は、科学の対象としてのコニ
ーグ式複式休火山である。ここでは神
々さえも体系化されている。力作ぞろ

「赤山」を手にしてほんとうに立派
であり、経費の点で相当な無理がある
のではないかと感じました。郷土出版
の特殊性を失わないよう願うことはい
うまでもありませんが、年に三冊でも
四冊でも、また頁数にも弾力性を持た
せて刊行願えばよいと思います。

とにかくこのクミやま文庫が私達
の、そして多くの青少年達の心の支え
になるよう願って止みません。

「赤城」をよんで

沢村 松 江

(前橋市・主婦)

「赤城」の文字に志賀先生の御姿を
思い、先生を囲んだ座談会を幾度もよ
んで、しみじみと赤城は古来から多く
の人々に愛され、親しまれた美しい山
である事を知りました。

一頁一頁ひき入れられるように読ん
で参りますうち、この執筆の方々が郷
土の方々であつて、愛郷心のあふれ

いだけに、一気に読破するというわけ
にはいかない。(読みうる力をもつて
いる方々は論外であるが。)

今日の学問は、幾多専門に分化して
いる。従つて、科学性を志向する郷土
誌が事項羅列的になることは、避けが
たいかもしれない。ふるさとへの慕情
を客観化するには、相当高度な知識の
支柱がいる。つまり、冷徹な知性が支
配するのだ。

今後、みやま文庫が、一度分析され
たものを総合して(時には、分析され
た形のままで)私達に夢を——茶の間
のにぎわいとなる夢や、未来への希望
を抱かせる夢を——与えていただけ
ば、幸この上もない。



たその深い御研究は、私のように他県
から来たもの(宇都宮生)には一層
心にしみ入る程の感激でございまし
た。

忠治についても十二分の文献を集め
られて探究なされている事も深い感銘
でした。気象植物もむづかしいと思いま
した。林業も一つ一つ教えられ導かれて
赤城の端から端まで一気に歩いた思い
で読みふけりました。特に民家の型
は興味深く群馬特有のもので養蚕と関
聯した構である事などを知り、栃木など
と比較して大変面白くみました。こ
うした豊かな詩情と山水の県を誇る赤
城こそ芸術に生きる人をはぐくみ育て
て来たことを思い、有名人の来去に
いとまもない事も尤な事と痛感しまし
た。

この本に続いて二巻三巻と発刊され
ます日をまつています。家中で大切に
読みあつてたのしみしたいと思います。

郷土をよく知るために

大石 正 光

(労働基準局指導員)

今、社会では青少年を健全に伸ばそ
うとする運動が活潑に進められており
ます。しかし、なかなか思うような実
績が挙がっていないというのが実情で
はないでしょうか。もうこの辺で青少
年には、大地に足をしっかりとつけて歩
つてもらわなければならないと思いま
すが、そのためには自分の郷土をよく
知り、ほこりを持つということ是非常
に大切なことだと思います。

この度関係者の特別のお骨折りによ
つてクミやま文庫が生まれ、その初
刊として「赤城山」が配本されました
が、この企画は私自身のためには勿論
多くの青少年に、いろいろな面から郷
土群馬を知らせるといふ点で極めて意
義深いものがあると信じ、深甚の謝意
と多くの期待を寄せている次第です。

「赤城」によせて

阿部 敏 子

(前橋市役所職員)

侍ちに侍つた「みやま文庫」の第一
巻がようやく手渡されました。

急ぎひもとして見ますとそれは上州
第一の山「赤城」についてでした。

みやま文庫の第一巻が「赤城」であ
るという事は私にとつてとても嬉しい
事でした。赤城の南麓に生れ朝夕な
赤城の勇姿を仰いで育ち幼い時から
「道に迷つたら赤城のある方が北だと
思え」と教えられて来た私、又数年を
故郷と離れて過した経歴の有る私にと
つて赤城は又と無い頼もしくも懐しく
もある山なのです。

この本は赤城の伝説又四季折々の赤
城の風情が面白く書かれその上に赤城
の歴史、風俗、気象、地質等々が、専
門的な立場から詳しく書かれて居りま
すので趣味としてばかりでなく又良